

追悼



長瀧重信先生を偲んで

山下 俊一

Yamashita Shunichi

東京電力(株)第一原子力発電所事故以降、内閣官房の原子力災害専門家チームの一員としてご活躍され、生涯現役を貫かれた長瀧重信先生が、2016年11月12日ご自宅でお仕事中に倒れられ、胸部大動脈流破裂の診断でご逝去されました。享年84歳でした。

まさに、亡くなられる1週間前、第59回日本甲状腺学会学術集会の専門医教育セミナーIIにおいてご講演いただいた「甲状腺におけるヨウ素の薬理学的作用」が最期の雄姿となりました。長瀧先生の突然の訃報は晴天の霹靂であったのではないかと想像します。しかし、長瀧先生ご自身は、一期一会の覚悟で病魔と闘いながら、決して弱音や泣き言を一言も発せられることなく、生涯現役の姿勢を貫かれ、日本の甲状腺学、そして世界の放射線医療と防護に貢献することを信条とし、長年にわたり日々努力と研鑽を重ねておられました。その紳士然とした研究姿勢には、学ばせていただくことが多くありました。

以下、長瀧重信先生のご略歴を紹介し、追悼の言葉に代えさせていただきます。1932年1月18日お生まれで、1956年3月に東京大学医学部卒業後、沖中重雄教授の指導の下、1961年3月医学博士の学位を授与され、同年7月から1963年5月までハーバード大学医学部に留学されています。帰国後は東京大学第三内科（中尾喜久教授）に所属され、学生紛争の渦中で助手、講師を務められ、ヨウ素代謝や自己免疫性甲状腺疾患を中心に、多くの研究業績を挙げられています。

1980年12月16日東京大学医学部附属病院外来診

療医長（講師）から長崎大学医学部第一内科学講座の主任教授として赴任され、革新的な教室運営をされました。国内外の学会への発表のみならず国際的な競争環境下に教室員を導かれました。自ら率先して先頭を走り、臨床と研究の両輪を牽引されてこられました。国際学会では、内分泌学会や甲状腺学会、そして核医学会を中心として指導的な役割を担われ、海外との学術交流を推進され、ご自身も多くの受賞や学会長を歴任されてきました。特筆すべきは、唯一の被爆医科大学を継承する長崎の地にあり、原爆被爆者の科学的調査研究を使命と考えられ、WHOやIAEAでの重要な役割を担ない、チェルノブイリ原発事故後の健康影響、とりわけ甲状腺がんの増加についての国際的な共同事業を主導されたことです。

1997年3月長崎大学医学部ご退官後は、放射線影響研究所理事長として活躍され、この間、解離性大動脈瘤という危機的状况から見事に回復され、奇跡の生還と呼ばれています。そして2000年10月には京都国際会議場において第12回国際甲状腺学会の会長を務められ、高円宮殿下ご夫妻のご臨席を得て、成功裏に終えることができました。2015年のオランダでの第15回国際甲状腺学会では、83歳という最高齢で「放射線と甲状腺がん」に関する基調講演の重責を見事に果たされ、会場の喝采と称賛を受けています。

2011年3月11日の東日本大震災に続く福島原発事故との遭遇により、政治や行政、そして社会との対話を余儀なくされるという困難な状況下にあっても、長瀧先生の信念は揺るぎないものでした。多くの学術誌やメディアへの投稿の中でも、丸善から「原子力災害に学ぶ放射線の健康影響とその対策」を上梓し、その英語版も出版した熱意は驚異的でもありました。大病を患いながら、最期まで科学と社会の最前線でご尽力なされました。

常に挑戦し、切磋琢磨する長瀧重信先生のご業績の大きさに圧倒されますが、それでも弟子である私たちは、現代リスク社会の困難に挑戦し、諸課題の解決に向けて精進し続けなければなりません。そのような覚悟と準備の大切さを教えていただいた長瀧重信先生に、心から感謝とお礼を捧げて追悼の言葉に代えさせていただきます。合掌。

（長崎大学理事・副学長／福島県立医科大学副学長）